

回胴倒錯者

— PACHISLO FREAK —

終宴

オールナイト営業もいよいよ閉店となる数分前、今まで部屋で休んでいた店長が事務所に入ってきた。

「どうだった？」

「おもわしくはありません」

店長はホールコンピュータを閲覧し、こちらを振り返って言う、

「だめだったねえ」

「はい」

私が一言返事をすると同時に、ホールの音楽が止まり、閉店のアナウンスが流れ始めた。

「閉店作業をします」

その場にあまりいたくなかった私にとって、閉店アナウンスはまさに救いのアナウンスだった。

いつものようにいつもの閉店作業を行い、いつものように終礼を行う、そして皆が帰路につく。長いオールナイトがようやく終わりを迎えた。絶対的な営業時間は昨年同様だが、相対的に感じるそれは遙かに今年の方が長かった。理由は語るまでもないだろう。

終焉

皆が帰ったあと、最後の仕事が私には残っていた。設定変更である。

「店長、明日の設定ですが……」

こう切り出した私に対し、間髪入れずに次のように切り返してきた。

「もう、設定を変更する必要はない」

「……」

「勘のいいお前ならわかるだろう」

「はい、分かります。いつまでの営業ですか？」

「今月末だよ」

「では、従業員にはいつ伝えますか？」

「もう少し先になる」

「わかりました。しかし、彼らにも生活があり、いろんな事情もあると思います」

「お前の言いたいことはわかってる。極力早めに伝えるつもりだよ、お前も身の振り方を考えることだ。うちの会社に残るなら名古屋に転勤、もちろんその役職に変更はない」

「はい分かりました。結論は10日までよろしいですか？残りの社員には私から伝えます」

「分かった、そうしてくれ」

数日後、店長から従業員たちにそれが伝えられた。驚きを隠せないものもあれば、残念そうなものもいた。私はその日のうちに、社員たち個々に今後について聞いて回った。

「B君、お前は社員だ、今後はどうするつもりだ？この会社に残りたいのであれば、転勤となるが残ることができる。役職も班長のままだ」

「主任はどうされるおつもりですか？」

「さて、どうするか、10日まで考える」

「そうか、俺は今から少し寝る、何か用があればこいつらを使ってくれ」

「はい、ありがとうございます」

しばらく徘徊、観察をしていたが、正直この店舗で得られたプラスのものは殆どない。どちらかといえばマイナスのそ

猶予をもらったから、それまでには結論を出す。とりあえず、休みの日にうちの会社の他店舗を探索してくるわ」

「そうですね、僕は僕なりに考えます、10日までは必ず返事をします」

「わかった」

他の社員にも同様の内容を伝え、その意思を確認したのである。

探検

車で名古屋に向かっていた。他店舗の様子を調べるためだ。私は名古屋に数店舗ある当チェーン店の中から2店舗を訪問先に選んだ。1つ目は部長が常駐し、売上も稼働も当チェーン店でも最成績の良い店舗である。

正面出入り口から入ると、そこは活気で満ち溢れていた。適当な従業員を捕まえ、

「事務所はどこ？」身分も明かさず、いきなりこう聞いてみた。しかし反応はイマイチ。

「えっあつ……」

私のことはほったらかしにしてお客さんの呼び出しランプに、まっしぐら。仕方がないので別の男性従業員に同様の質問をしてみると、戸惑いながらも、事務所ではなくカウンターに連れてこられた。その男はカウンター係りと少しの会話をし、ホールへ戻っていった。

「私は○○店のAというものです、事務所に案内していただきたい」

れのほうが多い。転勤という考えが1歩後退した瞬間だった。はたして次の○○店ではなにか発見があるだろうか？少なくともさっきの部長の店舗より期待しているのだ、なぜなら、その店舗には元当店の主任である私の恩師がいるのだから。



●レッツ（1997年メーシー）

当時はコンドルの影響が極めて強く、ユニバーサル系の機種はコンドルと酷似したものが多く、この機種もその一つといえる。コンドルとコンテストの融合といった感じだろうか。また、絵柄は「コンドル」の硬派なイメージとは程遠く、かなり可愛らしい作りになっている。ビッグ絵柄の7はどう見ても平仮名の「て」しか見えず、多くのスロッターはそれを「て」と呼んでいた。ポーチス中のハズンの恩恵はコンドルに肩を並べ、フル攻略に設定1でも機械割は100%を超える。ビタ押しでのハズンが多かったため、難易度は高い方に分類されている。



●ドギージャム（1997年エレノ）

コンドルが下火になってきたころ私がメインで打っていた機種。技術介入の恩恵は非常に高く、ハズンの難易度も激高。この時期の機種では最も難しいと言っても過言ではない。その難易度の高さから、ホールには高設定も多々設置されており、できなくて勝ち組負け組が分類された。大フレイクとはなりましたが、後には「ドギージャム」が分業された。後には「ドギージャム」が分業された。後には「ドギージャム」が分業された。



●クランキーコンテスト（1997年ユニバーサル）

コンドルの後継機。ハズンはビタ押しとなり、JACゲームでの払い出しは14枚となった。配列も変更された。コンドルの代名詞である「書テン」は存在したが、そこを狙わないようになっため見ることもなかった。「書テン」を狙うと小役を取りこぼすことがあるから。機械割は低く、ハズンができない者には設定6でも100%を下回る極悪仕様だった。以上の理由により、ホールには高設定が「コロボロおいてあり」部の技術者には格好の獲物となっていたが逆に酷評する声も多く、後に技術介入性を若干緩和したコンテスト2が発売となった。



●そんなカバな（1997年山佐）

いつも斬新な発想が目につく山佐から発売された、足し算リーチ目型パチスロ。各絵柄には数字が書いてあり（ベル12点、チェリー14点、等々、出目の並びの合計が7点、17点である）、足し算をするのは数ゲームのみ。すぐに飽きてしまったリール制御でリーチ目もだいたいわかってしまう。ビッグ絵柄が7ではなく5だったのも業界初。こういうくだらないところにも変化や斬新さを果敢に取り入れる山佐の姿勢、私はとても好きです。

「はい、失礼いたしました、こちらです」
案内された事務所では丁度遅番の朝礼が始まろうとしているところで、傍らには部長が座っていた。
「おう、A君じゃないか、まあ座れ」
「朝礼中ですが、よろしいですか？」
「いよいよ別に、座れって」
私がわざわざ着席に対して許可を申し出たのは訳がある。その座る場所が異様なのだ。横長のテーブルを挟んで、従業員と役職者に分かれて向かい合って朝礼をしていたのだ。私と部長は朝礼に挟まれたテーブルに向かい合って座っていたのである。
「おい、誰かコーヒーでも出さんか！」
朝礼中の従業員にどなりつける。慌ててその中の一人が朝礼そっこのけで私にコーヒーを出す。
噂には聞いていたがかなりの理不尽ぶ

A氏プロフィール

三重県出身。三重の高校を卒業後、進学のため大阪へ。学業よりもパチスロに専念してしまいお決まりコースの大学中退。中退後3年間はパチスロで生計を立てる。その後サラリーマンになるも副収入はパチスロで。結婚のため三重に戻りホール店員となる。現在は知識と経験を生かし某店で設定師として手腕を振るっている。目押しレベルはスイカの種まで直視できるほどの異常っぷり。

思い出の4号機たち